2016年5月18日

八街キリスト教会：祈祷会

**「マラキ書：主イスラエルを愛す」**

聖書箇所：マラキ書1:2-5、2:17-3:1、4:4-6

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はマラキ書です。十二小預言書の最後であり、旧約聖書の最後の文書になります。十二小預言書はホセア書で始まりマラキ書で終わりですが、大体成立順序に並んでいます。マラキ書には他の預言書にあるような、預言された時期を示す言葉はありません。しかし、内容的に考えてバビロン捕囚されたユダヤ人がペルシャ王クロスによって帰還を許され、神殿再建をし、そこにおける礼拝をユダ族の宗教の中心としたユダヤ教成立後の時期と推定されます。BC430年代にネヘミヤの宗教改革がありますが、マラキ書に描かれている宗教事情は聖書記者から見て褒められた状況ではありませんので、その宗教改革の波も収まったのち、と考えられます。従って、BC400年頃と思われます。マラキ書の直前の預言書ゼカリヤ書の時代から百数十年経ている、ことになります。

その頃の政治社会状況を簡単に見ておきます。伝統的に、パレスチナの地は北にはペルシャ、南はエジプトという大国に挟まれ翻弄されてきましたが、この時期エジプトはあの勢力を誇ったネコ帝の第26王朝が滅び、まだプトレマイオス朝が登場する前であり、パレスチナに勢力を及ぼすことなど全く無理でした。パレスチナの地はバビロニア帝国を破ったペルシャ帝国の支配下にありました。「総督」が派遣されパレスチナを統治していました。神殿再建を実行したユダヤ人・ゼルバベルは「総督」としてユダヤに返されました。ペルシャは民族の自立性を重んじ、宗教的寛容策を採用します。いわば、税金さえちゃんと払ってくれれば自らの宗教は認める、というものです。マラキ書の時代は比較的平和な時期であったと推察されます。ユダヤ人のエジプトへの植民活動が盛んであった、ということや、日常用語のアラム語化が進行していたことなどが言われていることです。

マラキ書ではこのマラキの素性を推察できる記事はありません。また人名としてはほかになく、これは人名ではないのではないか、という説もあります。マラキという言葉の意味は「私の使者」と言う意味です。3:1に主なる神が「わたしの使者を遣わす」と言われますがその「私の使者」は「マルアーキー」です。ここから文書の名前が取られたのではないか、という訳です。しかし、他の預言書の文書名は預言者の名前を冠していますので、マラキとい名の預言者が居たと考える方が素直なように思います。とにもかくにも本文に入って行きましょう。

まず、最初の「宣告」という言葉です。預言の最初にこの言葉が挙げられているのは何か所かあります。ナホム書1:1で「ニネベに対する宣告」、ハバクク書1:1が「預言者ハバククが預言した宣告」、ゼカリア書9:1が「宣告」、同じく12:1、そしてマラキ書1:1が「宣告」という言葉で始まっています。イザヤ書には15:1の「モアブに対する宣告」をはじめ多数あります。この「宣告」と新改訳で訳されている言葉はヘブル語から直訳しますと「主の言葉の宣告」という３つの言葉です。口語訳では「託宣」と訳されています。宣告というのはヘブル語で「マーサー」ですが「マサー」という「重荷を負う」という意味の言葉からきている単語です。従って、この最初の言葉は「主のことばの重荷」ということになります。「主の言葉」が誰かの重荷だというのです。「重荷」と言う限りプレッシャーを与えるものでしょう。預言者は皆好き好んで主の言葉を民の告知した訳ではありませんからこの「重荷」は預言者に対する召命の重圧と考えるのが妥当です。マラキについてはその重荷のことは直接書かれていませんが、彼とて馬鹿にされること承知の上で預言するのですから重圧であったに違いありません。しかし、この重圧はイスラエルの民、指導者に対するプレッシャーでもあるはずなのです。信仰の危機にあることを認識していれば、マラキの預言を重荷として受け止め、それを担って行かねばならない、という信仰回復の姿勢に転ずるはずです。しかし、マラキ書にはその重荷を背負う民族の姿は見えてきません。

2節の最初は「「わたしはあなたがたを愛している」と主は仰せられる」です。内容は説明の必要ありません。主なる神がイスラエルを愛している、というのです。「聞け、イスラエル」ではじまるシェマーというイスラエルの祈りの典型的なものがありますが、そこで述べられているのは「心を尽くし、精神を尽くして、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」です。申命記6:5です。マラキ書では「神を愛する」ことについては触れて居ません。このあとのマラキ書の記述をみるとイスラエルは神を愛している、とは思えません。しかし、マラキ書ではイスラエルの状況を見る前に、「わたしはあなたがたを愛している」と言われているのです。新約とか旧約という時の「約」は「契約」の約だと言われます。契約と言うと神と人間が契約をした、と思われがちですが、聖書に言う「契約」は神から一方的なものです。人間には拒絶する自由は与えられていますが契約内容を提案する力はありません。むしろ契約、というより、神様からの一方的「約束」と理解した方が良いように思われます。その主なる神が一方的約束として「わたしはあなたがたを愛している」と言われているのです。“あなたがたがシェマーで命じられたように私を愛することがなくても「わたしはあなたがたを愛している」”というのです。これが新約での福音に繋がっているのです。マラキ書ではイスラエルの主なる神への不信が繰り返し、繰り返し述べられます。実にそれでも「わたしはあなたがたを愛している」というのがマラキ書の中心的メッセージです。

主の「わたしはあなたがたを愛している」との言葉に対し、イスラエルより具体的にはユダヤ人は「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか」と反応します。“「愛されている」というのは本当かな？よく解からいのですが。決められた祈りも奉げているし、いけにえ、も献上しているから神様から文句を言われる筋合いはないとは思うのですが、神様が私たちを愛するってどういうことですか”、と言う訳です。先ほどの時代背景から言ってユダヤ教社会は一応確立し国家祭儀としてヤハヴェ宗教は出来上がっていた、と思われます。この平和な時に信仰の情熱は失われ、国としての宗教が信仰にすり替わっていたと予想されます。このようなことは宗教の歴史にはしばしばでてくることです。私たちの信仰姿勢にもこの安易な気持ちが支配していないか常に振り返ってみる必要があります。個人としても信仰の覚醒を与えてくれる場に自らを置くことが時々求められます。

6節以下1章の最後まで当時のユダの人々のしらけた感じのことが繰り返されます。まず父と子の尊敬の比喩からの主なる神への畏れについて当時の祭司は「どのようにして、私があなたの名をさげすみましたか」という。ちゃんと祭儀を守り、生贄をささげ、律法を守っているのだから主なる神に絶大な敬意を表しているのではないか。なにを神様は言いがかりを言われるのか、と言いたげです。次は祭壇に捧げる奉げ物についてです。最上のものを奉げよと言われているのに対し、祭司たちは「どのようにして、わたしたちがあなたを汚しましたか」とうそぶく。10節の最後では、主は、敬虔な信仰に裏付けされていないささげ物は受け入れない、とまで言うことになる。11節では諸国の民のところできよいささげ物が奉げられている、ということを主がいわれると、ユダ族の祭司たちは「主の食物は汚れている」などと言っている。マラキは諸国の民の信仰を全面的に承認しているわけでもありませんが、散らされたユダヤ人の住んだところでは真のヤハヴェ信仰が見られたところもあっただろう、と思われます。あえてエルサレムにあるユダ族の信仰を比較して批判しているのだと思われます。13節以降もささげものについて類似のことが言われています。

2:1-9節は祭司の堕落の状況について述べています。1節で祭司たちに対する命令であることが明らかに宣言されます。2-3節で祭司たちの嘆かわしい状態を示し、4節で主なる神とレビとの契約を思い起こさせます。レビは祭司たちの最も最初の祖先です。5-9節でレビとの契約は命と平和の契約であるとのべ、レビの敬虔な態度を思い起こさせ今の時代の祭司たちは道から外れ民にさげすまされる状況に立ち至っていることが指摘されています。緊張感のない世界では祭司は一応の定めを守って祭儀を執り行っていればよい、と皆からみられ、その社会的地位も低くなり、彼らの倫理性も低下していたことが推察されます。あえて言えば、現代の日本でも神主さんたちはそう言われてもおかしくないかもしれません。ヨーロッパにおける国教会牧師職もそのようなきらいはないでしょうか。

10-12節はユダ族についてです。ユダ族は真のイスラエル信仰を保つ者として存在意義があったのではないか、外国の神信仰に染まった娘と結婚したりしているではないか、という。イスラエル信仰に明確に改宗したのなら格別、異教の神信仰をヤコブの裔に持ち込むな、という事です。それはユダ族の先祖の神との契約を汚すことになる、という訳です。更に13-14節で結婚について言っています。最初に神様が与えてくれた妻を大切にせず、別の異邦人の妻を持ったりするのは主なる神への裏切りであり、最初の妻の涙、悲鳴、嘆きが祭壇をおおっている、と言われています。最初の妻こそ、神様との「契約の妻」である。「離婚を憎む、とイスラエルの神、主は仰せられる」とあります。2章では祭司たちには「いのちと平和」を賜る「レビとの契約」、イスラエル信仰の純粋さを保つ「ヤコブの契約」、そして最初の妻とのイスラエル信仰家庭を与えられた「契約の妻」のことが述べられていました。これらの契約は、主なる神の恵みの約束です。これらを守るとは恵みの中に留まることを意味します。

2:17から章をまたいで3:12節までは神の義について語っている箇所です。最初の2節を先程読んでいただきました。また3:1は使者というのはバプテスマのヨハネを預言しているとしてマタイ11:10節で引用されている箇所です。しかし、マラキ書の文脈に添って理解しようとしますと、将来預言とは異なる様相が見えてきます。2:17でユダの指導者は言葉で主を煩わした、即ち主の言葉を騙（かた）って、民を祝福し、イスラエルの信仰をまちがった方向に導いた、と批判されています。これに対し、ユダ族の指導者たちは、「どのようにして、私たちは（主なる神）を煩わしたのか」と全く罪の意識がないことが明らかになっています。また、“悪を行っていると言われている者達もみな善意でありみな主の心にかなっているはずだ、裁きの神などはおらず祝福する神のみだ“と言っていたようです。これに対する、神様の答えが3:1です。もう一度お読みします。「「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。 彼はわたしの前に道を整える。 あなたがたが尋ね求めている主が、 突然、その神殿に来る。 あなたがたが望んでいる契約の使者が、 見よ、来ている」と万軍の主は仰せられる」と言われています。「あなたが望んでいる」というのは2:12の文脈からして皮肉です。私の使者とか契約の使者と言われているのは誰かは述べられていません。ユダヤ教の正統派ラビはエリアを指していると解釈しているようです。イエス様はバプテスマのヨハネを褒める時、ここを引用しています。2章で３つの契約が挙げられていることとのつながりで考えると、ここで「契約の使者」と言っているのはモーセと神様のシナイ契約と関連はないのか、と考えさせられます。イギリスの保守派神学者ジョイス・ボールドウィンがその可能性を指摘しています。出エジプト記3:3には神の山ホレブで「主の使い」が現れたと記されています。マラキ書に言う「契約の使者」とはシナイ契約に代わる新しい契約を携えて来る使者なのではないか、と言うのです。がぜん、賛成したくなります。福音書にあるバプテスマのヨハネを指すとのイエス様の説明も「心は」イエス様ご自身のことを指している、と解釈もできるでしょう。マラキ書における「わたしの使者」は実は「わたしの子」である、とも考えられます。新しい契約を齎したのはヨハネではなく主イエスご自身だからです。もし、このように理解するにしても旧約聖書での「神の使者」の一般的用法は神ご自身ではないことは明白であることは知っておくべきです。「わたしの使者」という言い方は一般的な「神の使者」とは異なる、と言わねばなりません。新改訳聖書で「わたしの使者」で調べるともう一か所あります。イザヤ44:26です。ヤコブに対する主の祝福の約束の中で「わたしのしもべの言葉を成就させ、わたしの使者たちの計画を成し遂げさせる」とあります。「わたしのしもべ」は預言者、「私の使者」はイスラエル信仰に忠実な王達を指している、と解釈できるでしょう。ここでの「わたしの使者」は複数です。マラキ書の「わたしの使者」は単数です。イザヤ書での預言者でありかつ王である一人の人を指し示している、と言えるのではないかと思います。それはメシアそのものです。

3:2-12節まではその契約の使者のなされることに関する説明です。ユダ族の指導者たちの罪の現実を指摘続けます。7節で「わたしのところに帰れ。そうすれば、 わたしもあなたがたのところに帰ろう」と言っています。ゼカリヤ書1:3で「わたしに帰れ。－－万軍の主の御告げ－－そうすれば、わたしもあなたがたに帰る」と言われているのと同じです。しかしこの悔い改めの勧めに対し、ユダ族の指導者は「どのようにして、私たちは帰ろうか」とか例の調子でうそぶきます。十分の一奉納をせずにいることは神のものを盗んでいると同じことなのにやはりユダ族の指導者は「どのようにしてあなたのものを盗んだでしょうか」などと知らんふりをしている。しかし最後に「万軍の主は仰せられる」としたあと、祝福の言葉が現れます。「わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、 あふれるばかりの祝福を あなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ---」と 万軍の主は仰せられる」とあります。このようなユダ族の人々に豊かな実りと幸いが齎されるというのです。文の流れから言うと大逆転です。実は、この逆転の前に、1:2の「わたしはあなたがたを愛している」という言葉があると考えられます。この言葉が大転換を引き起こすのです。このようなユダ、イスラエルの民を主は、いかなる状態にあろうと「わたしはあなたがたを愛している」と言われるのです。このような祝福が与えられるというのは、信じがたい奇跡と言わねばなりません。

　13節ではまた例のうそぶく態度があります。かたくなな自己中心の言辞を弄しているイスラエルはなんと「私たちはあなたに対し、何を言いましたか」と主なる神に問うています。不信仰な心情吐露について主なる神は彼らの中に目だたずにいる「主を恐れる者たち」が居ることに注目します。彼等は「記憶の書」に書かれます。そして17節、18節の主なる神の憐みの言葉です。「「彼らは、わたしのものとなる。 －－万軍の主は仰せられる－－ わたしが事を行う日に、わたしの宝となる。 人が自分に仕える子をあわれむように、 わたしは彼らをあわれむ。18 あなたがたは再び、正しい人と悪者、 神に仕える者と仕えない者との違いを 見るようになる」といわれています。あのうそぶくことばとこの憐みのことばの間にはあの「わたしはあなたがたを愛している」が厳として立っているのです。

　4:1-3節は「その日」即ち主の日の描写です。「義の太陽が上り、/その翼には、いやしがある」という表現は珍しい表現です。4節以降は最後のまとめです。「記憶せよ」が英語でrememberであり、思い起こす、の意味もあります。ホレブというのはシナイのことです。5節では主は最後の日の前にエリアを送る、と言われています。エリアは第二列王記2:11で「たつまきに乗って天に上って行った」と言われており、エノクと同様死を経験していない人物とされていました。マラキ書が書かれた時代に既に再来する、との伝承があったのかもしれません。いずれにしろ、マラキ書のこの主の言葉「預言者エリヤをあなたがたに遣わす」はメシア来臨の前にエリヤが再来する、との希望を定着させました。マタイ福音書11:10-14を見ると、マラキ書3:1の「契約の使者」、エリア、バプテスマのヨハネがイエス様によって同一視されています。そして最後6節に父と子の関係が復活するように神様と人間の関係を取り戻しなさい、と勧めています。新改訳では「それは、私が来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」となっていますが。ヘブル語語順に忠実に訳しますと、“そして、私は来て打たない、この地を、破滅で。”となります。この破滅は「へ―レム」であり、アナテマのヘブル語訳です。新改訳ではこの「へ―レム」に対応する訳が「のろいで」と「滅ぼす」の二重に訳されています。マラキ書で「へ―レム」が使用されているのはここだけです。新約聖書のラテン語訳というのが4c頃できますが、それには「アナテマ」が使用されています。BC3c頃の七十人訳と言われるギリシャ語訳では「へ―レム」は訳出されていません。これらのことから考えると、少なくともマラキ書の段階では「アナテマ」即ち「呪われよ」の意味ではなかったのではないか、と想像されます。いずれにしろ最後の語が「へ―レム」で終わると言うのはあまり気分の良いものではないことは事実です。そのため、ギリシャ語訳は、最後に4節を繰り返し、ユダヤ人が会堂で使用するヘブル語聖書は5節を繰り返す、ということをしています。日本語訳は原文に忠実です。むしろ、破滅に追いやることをしないため、神様と人の関係を修復しなさい、という悔い改めのメッセージですから、新約でのバプテスマのヨハネの第一声「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」に繋がって行く、と解釈できます。

　マラキ書を全体として見てみました。このようなユダ族の白けた感じは今の日本の状況に似ているように思われます。しかし、繰り返しになりますが、これらすべての上に、「わたしはあなたがたを愛している」という主の言葉が厳として存在していることを心に刻むべきです。